

## The Whisper from Amherst

### エミリーのささやき

これはエミリーの詩人論、ないしは詩論ともいえる作品です。詩人から独立して生きる「詩」そのものを、詩人が火をともしランプの芯にたとえて、詩人が立ち去っても、その芯が「生命の光」をもって燃えるならば、それぞれの時代がレンズとなって、その輝きを周辺に広げると述べています。エミリーは、自分が「小さき物」や「誰でもない人」であるという自己を強固にすると同時に、自分が消えたあとも作品が時代というレンズをとおして周辺に投射されることを、詩人の仕事としていたようです。

ということは、出版をあきらめ、自身亡きあとは燃やすように言い残したはずの1800点近くの作品が、時代というレンズをとおして静かに輝きを放っていることを心のどこかで予測していたのではないのでしょうか。

## The Poets light but Lamps—

The poets light but Lamps—  
Themselves—go out—  
The Wicks they stimulate—  
If vital Light

Inhere as do the Suns—  
Each Age a Lens  
Disseminating their  
Circumference—



詩人はランプに火をともしだけ—  
みずからは—消えていく—  
詩人は芯をかき立てる—  
もし生命(いのち)の光が

太陽さながら、そこに宿るなら—  
それぞれの時代はレンズとなって  
押しひろげます  
円周を—

(岩波文庫「対訳『ディキンソン詩集』」

亀井俊介 編より)